

寺領・古新田・木戸・藤井・平七・棚尾・新々田の三十一ヶ村であつたとのことである。

第七扇 御田扇祭の扱ひ所

(一) 御田扇祭は春祭と夏祭の混在

御田扇祭は、農産物の豊作を祈願する春祭的要素と災害除去を祈願する夏祭的要素の混在したものだと言われている。それは御神体である扇と鍬から考察できるとのことである。

扇が防災的な夏祭の象徴であることについて布川清司という方は「悪霊除けの神様として有名な熊野神社で扇祭がおこなわれ扇神輿がでることや、疫病除けの年中行事として有名な京都の祇園祭でも扇は山車の上で重要な働きをしている」などから



熊野の火祭り（扇まつり）

扇に厄病を祓い除ける力があると信じられているからである。

夏祭的要素は、疫病、害虫、風水害などの発生しやすい七月頃に「扇さん」の祭りが行われることや、田の間の小道を塩まきで歩くこと、さらには灯を付けずに高堤燈を持つことなどに見られる。

春祭的要素については、鍬を御神体とする春祭が存在していることである。

鍬を崇める信仰は、御鍬信仰と言われ伊勢神宮でも旧歴の二月初めに行なわれる鍬山神事、すなわち御田はじめの神事に用いられた鍬が全国的に祭られているからである。

その最盛期は御田扇祭の起源で述べたように明和四年（一七六八）頃と言われ、この三河地域にも多くの御鍬神社や境内社が創建されている。



京都祇園祭

七月一日の「吉符入」から三十一日の「疫神社夏越祭」まで様々な神事が行なわれる。

(二) 古語拾遺の烏扇

御田扇祭の神事の抛り所のひとつには、平城天皇へいせいの朝議に基
づき大同二年（八〇七）に「古語の遣りたるを拾う」として
作成された「古語拾遺」のなかの御歳神の項に次のような記載
がされている。（要約）

『御歳神の怒ります事がありて、蝗を放つて稲の苗葉を枯ら
さしめし時、此害を除くには烏扇を以つてこれを扇、それにて
も蝗の立ち去らぬ時は、牛の穴にくを溝口に置き、男茎形をつくり
てこれに加え、そのたつすだま慧子・蜀椒なるはじかみ・呉桃くるみの葉また塩などを
田の畔に撒き置くやうに』との教えに従えば稲の葉また茂りと
の故事から出たものと思われる。

この神事に用いられた烏扇（檜扇）を請けて田の中を扇ぐと
虫の害が祓われることから、岡崎領でも各手永が神輿に納め

古語拾遺の中の田扇祭

昔在時代、大地主神宮田之日、以牛穴
食田人干時御歳神之子至其田唾饗而還
以状告父、御歳神發怒、以蝗放其田、
苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神令片
巫、肱巫占求其由御歳神為崇宜獻白猪
白馬白雞以解其怒依教奉謝、御歳神答
曰、實吾意也、宣以麻柄作持持之、以
天押草押之、以烏扇扇之、若如此不出
去者宣以牛穴置溝口作男茎形以加之、
慧子、蜀椒、吳桃葉及鹽班置其畔仍從
其教苗葉復茂年穀豐稔

村々を廻り稲の虫害を祓い豊穰を祈ったのである。

第八扇 御田扇祭関連資料

第一節 御鋤神事

★内宮では二月朔日に神田に下種する神事

禰宜、内人、物忌等、当年歳徳神の在る方を鋤山として之に登り山口の神を祭り、木本祭を為し、木を伐つて忌鋤を作り、之を持って山を下り神田に臨んで耕田の型をするのである。又神官の一人が桶に小石を入れて種と稱へ、之を蒔く型をする事もあつた。此の時田舞と云う舞を為し、折敷を鼓の様に打って歌をうたふ。その歌の一つに

「あなたのし、今日の楽しき、いにしえも、

かくやありけむ、今日の楽しき」

六ツ美地区内の

鋤神を祀る氏神・境内社

氏神 野畑町、安藤町

境内社 小園町、下合歎木町、上合

歎木町、定国町、下三ツ木

町、在家町、高橋町



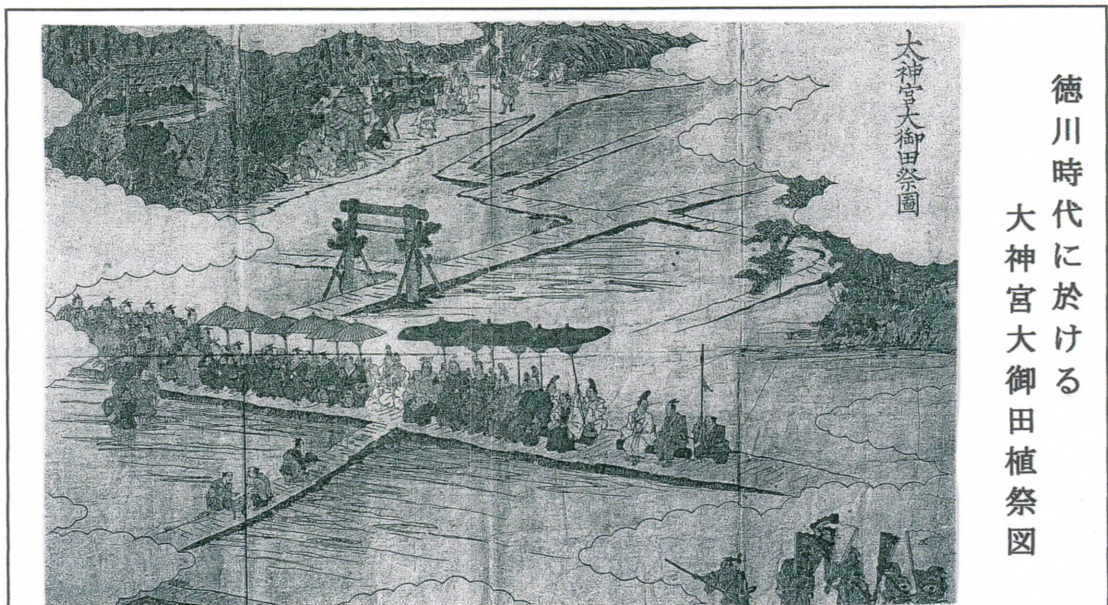
高橋町の境内社

★外宮では二月上亥日に神田に下種する神事

役人が榊枝を伐って忌鋤を作り、歳徳神の方に祭場を設け、役人が多賀山下に至って山入りの行事をなし、禰宜以下本宮に参拝して祭場に列座すれば、役人が修祓した後ち忌鋤で耕田の状をなし、禰宜も亦其の鋤をとり神歌を唱えて耕田のまねをして豊年を祈り、役人又祓を修し、各員八度拝して退座するのである。是より諸所の神田も耕作せられ、民間のも耕作せらるる事となつたのであるが、明治五年二月に此の神事は廃せられた

第二節 御田植神事

外宮において五月下旬の吉日に田上大水神社後の大御田、おみた俗に精神田といふにて行なわれていた神事である。御田祭とも云う。日別朝夕の大御饌に御供えする御料米は、みじょうくでんすべて御常供田といわれる御田から奉るので其の御田に稲苗を植える祭りである。



当日神宮より大物忌父が参つて苗草を蒔き清め、子良が之を植え始める。此の時神楽役人が素襖・烏帽子にて田畔に列び、鼓をうち笛を吹く。その時の歌の一つに

「ちはやふる神のめぐみをうけそえて豊宮崎に早苗とるなり」

祭畢つて田長以下十人、老顔に紅白粉を施し、素襖・烏帽子に襷を掛け、棒振とて金箔を貼つた六尺ほどの棒を持ち、七人ばかりは長さ六尺・上幅五尺余りある金銀にて色彩繪の大きな扇を持ち「おみたやさんぼ、棒ふれさんぼ」と唱えながら、長官屋敷へ練りこむといふ例であつた。この棒を戴けば疱瘡・麻疹等が軽いとて子供に戴かせ、また長さ上幅共に一尺余りの扇を作り、これを御田くばり扇と稱し田畔に刺せば虫除けけとなるとて、争うて之を貰う風もあつた。

この神事は明治四年の神宮改正により全く廃絶となつたが、五十有余年経て大正十三年から其の儀式の一部が再興せられた。

内宮の往時のお田植行事の概要

内宮のご常供田（神田）は楠部村に有つて、5月中旬頃に神田で儀式と御田舞が行なわれてから長官邸に出向くことになっている。

御田舞とは楠部村の長老と20人程の踊り手が素袍に侍烏帽子を冠り、袴を高く掲げた服装で、御田扇という扇を持って笛、太鼓の囃しに合わせて振り回し、変な腰付と足取りで「ハエーヤハエー」と謡いながら踊る舞である。

お田扇は、4尺程の檜の薄細板を6枚程を扇の骨のように下の方を釘で締めて要とし、折りたたみが自由で末の方に玉や松竹梅など朱色で描いた紙を張つたものである。

長官邸では笛・太鼓の音が聞こえてくると、長官を始め関係者がそれぞれの席について御田舞の一同を迎えると、程なく門外から笛・太鼓の囃しに合わせ「ハエーヤハエー」と踊り込んでくる。そして、玄関前で囃し方は後方に控え、踊り子が前方に円形をつくり

(次頁に続く)

現在の神田御田植初は、五月初旬に神田祭場において神事後、神職より作長に早苗が授けられ、作長は作丁を引き連れて神田に苗を植え初めますと、近郷の男女（神宮神田御田植祭保存会会員）の奉仕により、笛太鼓の音に合わせ田植えが行われます。

田植えが終わると奉仕員の中から十名が出て、手に竹扇を持って東西の耕作道に列立し、植えた苗を扇いで蝗を払う動作をします。次いで大団扇ごんぼうちわを持った二名の奉仕員が神田に入り、団扇合うちわあわせを行ないながら神田の中を三回巡り御田植式は終了します。

次に祝入ほぎいりと称して竹扇・大団扇を持った奉仕員たちが、神田近くにある内宮摂社ないぐうせつしゃ・大土御祖神社おおつちみおやじんじやに踊りこんで、「ほこり」と言う踊りを踊るなかで「船漕」と「どうまい」と言う所作を行い、最後に大団扇を破却して終了となります。

大団扇の破片は豊作や大魚満足の御守りとして、参列者が争って持ち帰る

40分間ほどぐるぐる廻りながら踊り続ける。それが済むと長官より全員に引き出物が与えられる。

その後、長官以下の参加者全員による宴会が繰り広げられる。宴会には、餅米を蒸した飯と海の物や川の物等の肴と酒が振舞われる。宴会が終わると踊り子たちは笛・太鼓で囃しながら村に帰って行く。

この神事は、外宮と同様に明治4年の神宮改正により廃止となった。しかし、50有余年を経て大正13年にその儀式の一部が再興された。

風習があります。

第三節 土呂山畠今昔実録

「御田扇祭は御鋏祭から移行したのではないか」と参河聴視録に記述されていることはすでに述べてきた。その御鋏祭や御鋏神社の創建などについて収録されているのが土呂山畠今昔実録である。岡崎市史の民俗関係にはこの御鋏祭のことが多く収録されている。

ここでは明和五年（一七六八）に成立した土呂山畠今昔実録のなかの御鋏神宮の一部を記述する。

★ その一

土呂山畠御鋏太神宮、森之外ニアリ天和三年二月建立ナリ、夫太神宮ハ、勢碓渡会郡山田之庄御鋏山ヨリ出サセ給、夫ヨリ村順送之、天和二年十二月十三日、当郷土還ラセ給、是ヨリシテ坂崎村エ欲ル奉ント還



土呂八幡宮由緒

永禄七年（一五六四）の一向宗騒乱時に兵火で社歴焼失、残存遺物文献によれば奈良朝末か平安朝初期と推測される。天和三年（一六八三）創建の土呂村御鋏太神宮（祭神伊雑大神）は、明治四十年に本殿内に合祀されている。

シ之所、俄カニ神風吹テ、御玉之櫛重ク成事如ク大岩盤石之、其外奇異之不思議多ク、奉棒御聞ク、神託ニヨリ為勸請・・・・

★その二

天和三年御鋏太神宮創建、屋根軒ニテ、東西一丈一尺、南北九尺、下柱六尺四方、長板葺也、金子七両二分岡崎兵右衛門請取也、棟上青銅壹貫文・備餅一斗取一重、大工兵右衛門ニ送之、村々送り之節、上ケ錢一四貫七百十二文櫛ニ付有遷宮、参詣之賽錢一貫五百文有、時之領主松平備前守政信公、当郷庄官筒井三之丞吉勝後理左衛門、此者野地稲干場願下為宮地下、肝煎松平勘介・筒井三之丞・石川忠兵衛・石原兵次郎・筒井八兵衛・河澄孫六・佐藤五郎八等也、上地・高須・萱園村庄屋共ニ棟札ニ記ス、其節同領隣村故、如斯右太神宮、天和二年十二月十三日当郷エ被遷玉勢効ヨリ、道々之村里布簾・紙旗・諸道具等奉リ思ママニ幾千万ト云、数ヲ不知、依之当郷ヲ始、高須・永井・萱園・上地里民

額田郡土呂村の変遷

天正18年(1590)宮部継潤を檢地奉行とする太閤檢地による村の石高が、624斗2升1合の近世部落として成立する額田郡土呂村の村域は、東西1町・南北1町余の寺域を有する本宗寺と、寺域外に広がる三河三ヶ寺の通庵、末寺ならびに1,200軒余の民家を擁した寺内町土呂の一部であった。しかし、永禄7年(1564)の三河一向一揆鎮圧の兵火によって寺内町土呂は焼失するが、その後、場所を南方の低地に移し石川伯耆守数正などの働きにより町が再興された。

土呂村は檢地帳や寛永郷帳では「村」扱いされているものの、承応3年(1654)には領主居城地のある碧海郡中嶋村とともに、餅売買の禁止から除外され「中島町・土呂町中は格別の事」と記されている。再興された「町」は、17世紀の中頃までには在郷町としての発展をとげ領主から「土呂町」として認識されていた。

不残集様々之出立ニテ太鼓・笛鼓ヲ鳴シ、紅白木綿ヲ奉、祓ヲ納、為御
移徒ト酒井餅三表ヲ氏子ニ配ス

土呂村庄屋 筒井三之丞

同 断 佐藤五郎八

同 断 川澄孫六

上地村庄屋 兵藤太郎右衛門

従五位下兼備前守政信創建

第四節 日本三大御田植祭

(一) 伊 雜 宮 (祭神 天照坐皇大御神御魂)

あまてらしますすめおおかみのみたま

志摩郡磯部町上之郷の皇大神宮別宮伊雜宮の御田植式は、相当古くから行なわれていたよう香取神宮、住吉大社と共に日本三大御田植祭として有名で、国の重要無形民俗文化財として保存されることになった。

御田植式は毎年六月二十四日で、古来磯部九郷の村人によって交代で

伊雜宮の由来

一般には「イゾウグウ」呼ばれ、創祀は二千年前の第十一代垂仁天皇の代です。倭姫命が皇大神宮に奉る御供物を採る所を定めるため、志摩国をご巡幸の際に伊佐波登美命が奉迎して、この地に当宮を創建して魂をお奉りしたと伝えられている。



奉仕されている。式は午前十時頃から始まり、全部終わるのは午後四時過ぎとなる。

式次第は、奉仕員一同揃って伊雑宮に参拝、お祓いを受けて御田に向かう。その順序は、先頭に杖指えぶりさし二人と立人たちど六人の八人は二十代の青年で菅笠を戴き中形の襦袢を着て紺の股引に手甲をつける。つぎに早乙女が六人（先頭の一人を奥若、次の一人を「さい若」）共に十二・三から十五・六歳の少女で、顔の白粉をつけ、眉をひき、菅笠を冠り、白装束の上に緋の袴をかける。

その後の「ささら摺すり」の二人は、十歳前後の少年で、菅笠を冠りスモンの派手な襦袢に紫色の脚絆をつける。

続いての太鼓打ち一人は、七・八歳の童男で「かつら」を冠り、作り眉をして少女に扮装し、介添人がついて御田の中で田舟に乗ります。

そして、行列の最後には笛二人、太鼓おど一人、小鼓こど一人、謡六人（内謡頭

お田植え歌

♪目出度めでたの御神田を植えて

踊り込むぞえ宮様へみやさまへ

♪今年しや豊年穂がさいて

枘は取り置け箕で量るはかる

♪杖立人早乙女たちが

植える姿は百合の花ゆりのはな



笛や太鼓の囃しの中で田植えが・

たてる。一下がりに謡曲を二番ほど謡うことになっている。

早苗を半分ほどを植え終わった頃の休憩時間に、ささら方の二人が田の中で舞踏を始める。これを早取挿さいとりさしという。この間、全員が若布わかめの肴で小宴を行ない、さらに続いて残りを植え終える。

御田植が終わると全員が列を整え「踊り込み」という踊りで煉り込みながら、再び伊雑宮に進み童男の納め舞で御田植式が終わる。

(二) 香取神宮 (祭神 ふつぬしのおおかみ 経津主大神)

香取神宮の御田植祭は、香取郡一帯で「香取まち」とも呼ばれ親しまれている。

以前は旧暦の五月五・六の両日であったが、今では桜の満開の四月第一土曜日と日曜日の二日間行なわれ多くの人たちが集まり賑やかである。

香取神宮御田植祭の第一日目は「耕田祭」といわれるもので、神田前に整列した地元の役職の人々の中央を笛や鼓の音によって神官の入場で



香取神宮の由来
宮柱の創建は、神武天皇十八年になると古文書に記されている。古くは伊勢神宮と同様式年造営の制度があった。現在の社殿は、元禄十三年徳川綱吉公の造営である。
境内には樹齡千年余の御神木がある。

始まる。祝詞奉上のあと色鮮やかな稚児・早乙女・巫女らが登場するなかで、社宝でもある狂言面をつけた三人の演者によって行なわれる耕田式がこの日のメインとなる。

舞は田を耕すしぐさに始まり、秋の取り入れまでを無言で演ずるのである。この後に行なわれる田舞では、菅笠をかぶり紺のカスリに小さな前掛けと赤襷掛けをした早乙女の八人が、神事御田植歌に合わせて田植えの神事を行ない一日目が終わりとなる。

二日目は神殿の前での耕田式のあと、神宮下の斎田まで早苗を手にした稚児が肩車されて一キロの道を進む。稚児は赤い布をぶらさげ大神田・司田・犬丸田・金丸太・利助田・駒田・長田・狭田と八つの神田名を大書した華傘におおわれている。

斎田では早乙女によって実際に田植えが行なわれ、笛・太鼓などのお囃子もされる。この田植えがすむとこの祭礼のクライマックス

神事の御田植歌

♪オーヤ見上げるお山は香取ホーイホイ
オーヤ見下す津の宮島居河岸へ見上げて
見れば香取、見下せば津の宮名所船着し
♪オーヤ香取で名所は桜の馬場ホーイホイ
オーヤ潮来が見えますほのぼのと
♪オーヤ鹿島の船津のちよる達がホーイホイ
オーヤ茜の襷で苗をとる
♪オーヤ目出度いものは芋の種ホーイホイ
オーヤ茎長く葉広く子を殖す



迎えることになる。

肩車されて稚児たちは華傘におおわれて神前に戻ってくるのだが、額につけた花と木の葉を描いた奉書製の宝冠が吹っ飛ばすような勢いで桜門に入ってくる。これは道中での見物衆に花傘を奪い取られないようにするためである。肩車をする人と稚児との一体感の行動を是非見てほしいものである。

(三) 住吉大社 (祭神 底・中・表筒男命の三神・息長足姫命)

そこ なか うはつつのおみこと

おきながたらしひめのみこと

住吉大社の御田植神事である御田は、毎年六月十四日に祭儀に続いて境内の約二段歩の神田で田植えをする間、中央の舞台と田のくろで農作を予祝する行事が行われる。

社伝によれば千七百六十余年の昔、神功皇后が大社を御鎮祭の後、長門の国から植女を召して御供田を植えさせられたに始まるという。植女は



住吉大社の御祭神

底筒男命、中筒男命および表筒男命の三神を総称して住吉大神といわれ、伊弉諾尊が黄泉からの穢れえを祓う禊祓いのときに生まれた神様である。息長足姫命とは神功皇后である。

旧社領の堺乳守に落ち着いて代々奉仕をした。植女は後に乳守の遊女になったので遊女たちも実際には田にも入ったが、何時の頃からか替植女に苗を渡して、代わりに田に入るのは実際の農家の婦人等になっている。明治維新以来、植女は新町廓の芸妓が奉仕することになった。その後昭和五十四年二月三日に重要無形民族文化財に指定された。

当日の午前十一時より、新町廓からの奉仕の植女うえめ、御稔女みとしめをはじめ役員等が揃って参入し、神館で粉黛、戴盃式を行なって神事に関わる奉仕の資格を得る。

午後一時に本殿祭の儀が始まる。官司以下神職、八乙女、植女、稚児、御稔女、風流武者、住吉踊の子等、替植女、奉耕者等は石舞台で修祓の後、第一本堂に参進して祭典が厳かに行われる。そして、神前に供えられた早苗が一つ一つ植女に手渡しされ、祭儀がすむと官司以下行列を整えて神田に渡る。

田植歌

♪神の田植えに目に立つものは
並ぶ乙女の赤だすき
♪出船入船日に千艘の船も
詣づる四社の前
♪松の間に淡路の見えて沖に
三つ四つの真帆片帆



神功皇后が長門国から召した植女

行列は神田を一周してそれぞれ控所に入り、御田式場の儀が始まる。初めに修祓が行われ、中央の舞台上で植女から替植女に早苗が渡され替植女が田に下りたつて植付を始める早苗授受が行なわれる。つぎに田舞、みとしろ新田代舞、風流武者行事、棒打合戦、田植舞、住吉舞と続いていくのである。これらの行事が替植女、奉耕者等による植付をしているあいだに順次行なわれる。

八乙女の舞う田舞は、住吉大社に伝わる巫女舞の一つで、奈良、平安の古い手振りを遣し文化財としても貴重な価値のあるものとされている。

なお、底筒男命・中筒男命・表筒男命の三神を住吉大神と総称されている。因みに古事記によると、この三神いざなぎのみこと伊弉諾尊が黄泉の国から葦原あしはらの中つ国に戻ったときに身の穢れを祓うための禊祓みそぎはらいをせられたときに生まれた神様です。

第五節 近郊の御田植祭



住吉神社御田植神事の風景

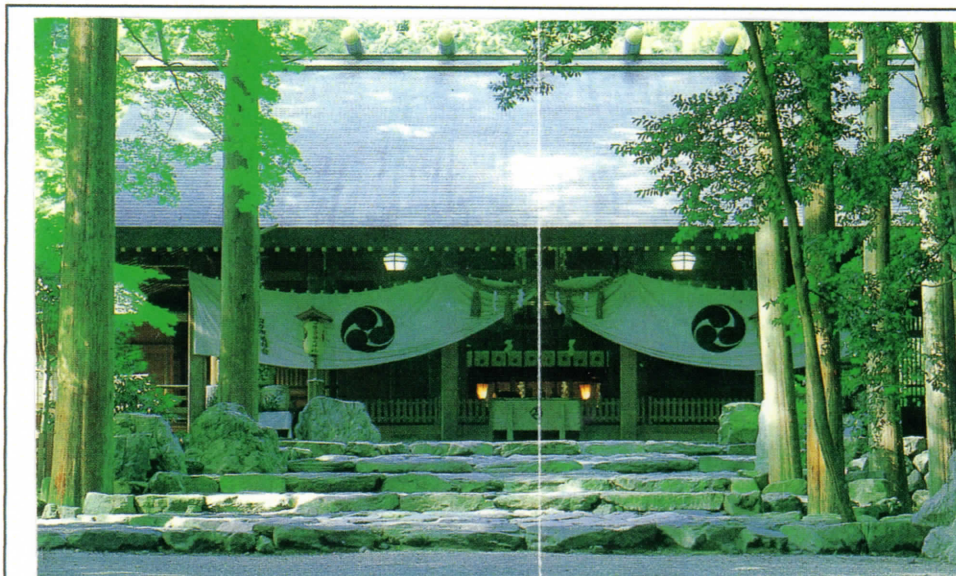
椿大神社（祭神 猿田彦大神）

当神社の御祭神である猿田彦大神は、人間が生きるために最も大切な稲作りの業を教え導いた神様であり、「田中の神様」とも称され多くの人達に敬われている。

椿大社の御田植祭は、平安時代前期に現在のよう祭りとなり江戸時代まで続いていた。しかし、明治に神領分割により中断されていたものが昭和五十一年に古式により神事として再興された。

御田植祭は、毎年六月の第二日曜日正午より神社拝殿で本殿祭が行はれ神前に早苗を奉り、五穀豊穰、開運祈願の祈り後、神饌田まで猿田彦大神および天^{あめのうずめのみこと}之鈿女命の姿を描いた二本の大団扇を先頭に、桃山時代の豪華な衣装をつけた八乙女、植方男、植方女らの道中行列が賑々しく繰り広げられる。

神饌田での神田祭は、玉苗をはじめ特殊神饌の飛魚が大前に供え



椿大神社の由来

往古神代、現在の神社の背後の高山入道嶽、短山椿ヶ嶽を天然のやしろとして高山生活を営まれたクニツカミ猿田彦大神を主神として……

られ五穀豊穰、台風除け、虫除けが祈念される。続く御田植神事では、早乙女から渡された玉苗が一字笠、紋帷子に鮮やかな茜襷に手甲、脚半姿の植方男、植方女により、古来より伝わる獅子神楽で奏でられるなかを玉苗が一株一株丹念に植えつけられる。

一方、神饌田横の特設舞台では、巫女による神楽舞や敬神婦人会、地元老人会による舞踊や「豊年踊り」が華やかに奉納され、御田植神事を一層盛り上げている。

無事に玉苗を植え終えた神饌田中央では、宮司の詠む御神歌に合わせて大団扇を三度合わせる「大団扇合わせ神事」が行われ、男女二神の和合の交歓に象徴される豊穰の願が込められて御田植神事が終わる。

猿田彦命

「口や尻が赤くて鼻がとても長いと」描写され、天狗の前身のような異様な神である。この神が天孫降臨の神話において葦原中国に降りる神々を高天原の道の辻で出迎えたおり、天之鈿女命から身分を質された後、その天孫の一行を地上まで先導する役を果たしたことはよく知られている。

そのことから境の神、道案内の神としての性格が導き出され、神社の祭礼の渡御の際の矛や杖などを持ち行列の先導や、四方固めを行なったりする。

祭神として祀る神社も数多く、また各地の神楽や太神楽に猿田彦舞がある。



猿田彦大神と天之鈿女命

おわりに

長く掛ったが「扇さん余話」として山方（占部筋）手永とそれに
関わるような事柄を自分なりに取り纏めることができたと思う。

今まで、読む側の者が書く側に身を置き、資料収集、聞き取り調査や
現地確認など物書きを生業とする人達の苦労を実感した。

有史以来、稲作に携わる人々の素朴で切実な五穀豊穡を願う虫送りから
御鋏祭・御田扇祭と遷り変わるなかで、勧請の対象も皇太神宮に供えられ
る物を採る伊雑宮から食物神の稲神として捉えられている豊受大神宮へと
変遷してきている。このことは、御師おしなどの地域に対する影響が大きいと
江戸末期に尾張の天野信景の著書「祭祀雑記」に記載されている。

一方、扇さんという地域の民俗文化を末永く継承・保存していくために
は、科学万能の社会にあっても時として、先人の生きざまに想いを浸し、
森羅万象に対する畏敬の念と祈りの心をもつこと忘れてはいけけないのでは



ないかと感じる。しかし、戦後、社会の生活環境が大きく変わり、農地の多くが宅地化され稲作等に携わる人々が激減するなかで、この祭りを継承・保存することは大変困難であることも現実的といえよう。

六つの手永の現状は、「御田扇祭の現状」で述べたとおり三つの手永は規模の大小は別として神輿の巡幸がなされている。残り三つの手永についても神輿の巡幸はないが、神社祭礼の中に合祀され魂が受け継がれている。これからも多くの人達の知恵と努力で祭りが末永く続けられていくことを愉しみにしている一人である。

最後になりますが長々と雑文を笑読して頂いたことに対しまして深く感謝を申し上げます。

平成二十六年六月七日



下知田所
小嶋之三夫



参考文献（順不同）

- 「扇さんあれこれ」岡崎市福桶町 昭和五十七年発刊
- 「扇さん（山方手永 御田扇祭）」上地八幡宮権禰宜 著
- 「岡崎市史・民俗・第三章）伊勢信仰の広がり」と民俗
- 「岡崎市史第五卷」 第七編 第四章村制・第二節村役人
- 「岡崎市史第八卷」 第十編 第六章祭事
- 「岡崎市史第貳卷」 第四編 第二節岡崎城主一覽
- 「岡崎地方史研究会（研究紀要第十四）」近世三河における「お鍬祭り」について 藤井寿一 著
- 「岡崎地方むかし噺 オオギさん（一）・（二）」岡崎藩に残る民俗行事 鈴木重一 著 東海新聞
- 「御田扇祭 堤通り手永」平成二十一年七月岡崎市宮地町発刊
- 「宇治山田市史（下）」鍬山神事・御田植
- 「古語拾遺」齋部広成（祭祀関係氏族）

「古事記物語」 鈴木三重吉 著

「古事記（口語訳）」三浦祐之 著

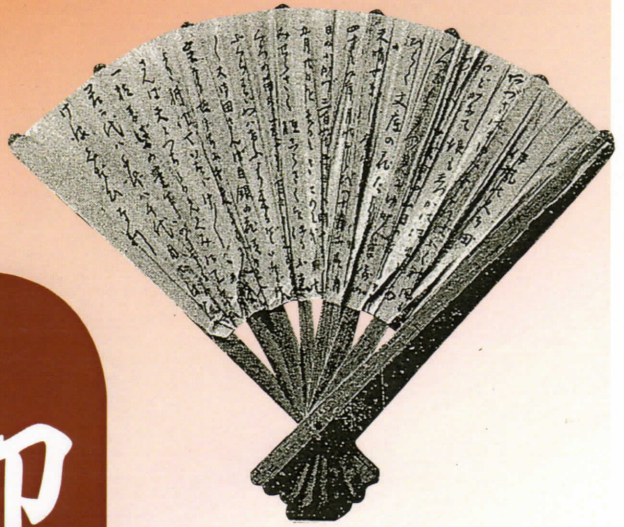
「神宮の稲と野菜・果物」神宮引報シリーズ第五 神宮司廳発刊

「神宮神田の御祭儀」 神宮司廳発刊

「神社のしおり」 皇太神宮別宮伊雑宮・香取神宮・住吉大社・椿大神社・土呂八幡宮・矢作神社

「初心者でもわかる日本の神々と祭り」株式会社メディアックス発行

「地図とあらすじで読む古事記と日本書記」株式会社青春出版社



御
田
扇

